

研修員報告〈テニス 谷澤 英彦〉



平成18年度・短期派遣（テニス）



I. 研修題目

ジュニアからプロ選手までの指導方法

II. 研修期間

平成18年11月30日～平成19年11月29日

III. 研修地及び日程

(1) 主な研修先

- ・パットキャッシュインターナショナルテニスアカデミー
- ・ゴールドコースト オーストラリア

(2) 受け入れ関係者

- ・ Pat Cash (元世界ナンバー1プレイヤー、1987年ウィンブルドンチャンピオン)
- ・ Chris Steel (アカデミーディレクター)
- ・ John Birrell (アカデミーヘッドコーチ)
- ・ Ben Mathias (ハイパフォーマンスプログラムコーチ)

(3) 研修日程

①通常研修

パットキャッシュインターナショナルテニスアカデミーにてパットキャッシュ氏から元世界ナンバー1の経験を活かした指導方法を学ぶと共に、オーストラリアでの指導方法を研修する。

②特別研修

- ・ ゴールドコーストで開催のジュニアトーナメント視察
- ・ 全豪オープン視察
- ・ ゴールドコースト女子国際視察
- ・ テニスクィーンズランドエリートキャンプ視察

IV. 研修概要

(1) 研修項目の細目

- ①研修動機について
- ②パットキャッシュインターナショナルテニスアカデミーについて
- ③練習環境について
- ④練習方法について
- ⑤コートサーフェスについて

- ⑥パットキャッシュ氏から学んだこと
- ⑦フットワークについて
- ⑧コーチングの違いについて
- ⑨テニスクィーンズランドエリートキャンプを視察して
- ⑩地元のジュニア大会を視察して
- ⑪ゴールドコースト女子国際を視察して
- ⑫全豪オープンを視察して
- ⑬その他、現地での生活について
- ⑭これからの課題

(2) 研修方法

パットキャッシュインターナショナルテニスアカデミーにてオンコートでの研修。近郊の大会視察

(3) 研修報告

①研修動機について

まず元世界ナンバー1プレイヤーのパットキャッシュ氏の指導を間近で見られるということが大きな要因だった。キャッシュ氏は現在もシニアツアーに積極的に参加するなど多忙なため限られた時間であったが、世界チャンピオンの指導を間近で見る事が出来た。また、オーストラリアはこれまでにロッド・レーバーを始めとするグラウンドスラムチャンピオンを数多く輩出してきた伝統国で、私が渡豪する以前にナショナルチームの監督をしていた14歳以下の選手との対戦でもオーストラリアはアジア・オセアニア地域において最大のライバルであり、スピードやパワーに頼らず、テクニクの完成度で勝負をするプレースタイルは、体格で劣る日本人プレイヤーにとって非常に参考になると感じた。また、現在テニス界では世界レベルに達するための目安としては14歳までに全てのテクニクの習得が必要と言われている中で、どのような指導をすれば低年齢期においてテクニクの習得が可能なのか興味が沸いた。

②パットキャッシュインターナショナルテニスアカデミーについて

パットキャッシュインターナショナルテニスアカデミー（以下PCITA）は、クラブ運営のほとんどを選手育成主体にしており、一般愛好家（日本でいうところのスクール）はごく一部となっている。日本でのクラブ運営は一般的に選手育成は利益が少ないためスクールで稼ぎ、その利益で選手を育成するケースが多い中で、選手育成だけに集中できることは指導者にとっても非常に良い環境と言える。その反面、生徒にかかる負担が大きくなり、選手コースの月謝は約20万円ほどで、練習環境の違いがあるので一概には比べられないが、金額だけを比べると日本の4倍近い。その分、選手の保護者やオーナーからの判断の目は厳しく、3月中旬に選手の成長が思わしくないという理由から、ディレクターであったJohn Birrellがヘッドコーチに降格になり、新たに元NSW州の州代表コーチのChris Steelが就任した。

私自身はJohn Birrellの情熱的な指導に好感を持っており、コミュニケーションも良く取



れていたことから、この降格は心情的に非常にショックだった。しかし、研修という観点から見ると色々なタイプの指導者から指導方法を学ぶことが出来た。実際、Chris Steelは物事を冷静に見るタイプで、指導方法も科学的、理論的であり、あらゆる面でJohn Birrellとは逆のタイプで結果的には2人の違うタイプの指導者からより多くの事を学べた。

③練習環境について

13面のハードコートにトレーニングジム、海外から練習に来る選手が宿泊できる寮やホームステイなど、豪華ではないが必要なものは全て揃っている。インドアコートは無いが、1年のうちに300日は晴れると言われているゴールドコーストではインドアコートの必要もなく、私の滞在中に1日中雨が降り、練習がキャンセルになったことはほとんどなかった。

1日の練習時間は2パターンに分かれており、学校に通っている選手は登校前の8：00～10：00と下校してからの16：00～18：00のエリートプログラムと、通信制の学校に通う選手、プロの選手などは10：00～12：00と13：30～15：00のハイパフォーマンスプログラムに分かれている。

ハイパフォーマンスプログラムには男子ジュニア選手に有望な選手が多く、16歳以下のオーストラリアチャンピオン、マーベリック・バーンズを始め、16歳以下のオーストラリア代表チームとして世界一を経験したアレックス・サンダース、ITF世界ジュニアランキング10位のステファン・ドナルド、同60位のジャレッド・イーストンなどが在籍している。

パットキャッシュ氏がいない時期については主にこのハイパフォーマンスプロ



グラムを担当するBen Mathiasコーチと共にどのような指導をしているかを研修した。Ben Mathiasは年齢はまだ27歳と若いですが、ナショナルコーチとしてグラウンドスラムなど引率をしているコーチで、現代テニスの状況を把握しており、非常に指導力があるコーチである。仕事の内容的には日本での私のポジションと同じような立場にあるので、共感しやすく色々な情報交換が出来た。

④練習方法について

ウォーミングアップ

日本でも最近ではウォームアップに動的ストレッチを取り入れているところも多いが、PCITAではダイナミクスと呼ばれる動的ストレッチを取り入れており、どれも今まで見たことがないような動作が多く、一つ一つのストレッチに「スパイダーマン」、「スーパーマン」など形を現した名前がついており、一度覚えればその名前を言うだけで選手がスムーズに動くのが印象的であった。

ラリードリル

日本ではカゴ一杯にボールを用意しての球出し練習が多いが、PCITAでは球出しはほとんど行わない。基本練習が少なく、フィーリングを高めるためのラリーはなく常に何かの課題がある。選手同士、生きたボールを打ちラリーをすることが主な練習。

オープンスキルを鍛える

日本ではより綺麗なフォームを目指し、打ち方（クローズドスキル）に時間をかける傾向にあるが、PCITAでは徹底的にオープンスキルを鍛え、How to hitではなく、How to winの習得を目的とした練習が主であり、ミスをした時には打ち方のアドバイスではなく、狙ったコース、球種、スピードなどが正しかったかをアドバイスする。1面に2～4人と少人数なためシングルスの実戦練習が多く出来る。フォームをチェックをする場合はプライベートレッスンを取るのが一般的となっている。

ポイント練習

試合を意識したポイント練習の中では体を動かすだけでなく、プレーの中に色々な条件を付け、より考えながらプレーすることを求められる。プレーのスタイルに条件をつけるものや、得点方法を変えるなどして精神的な強さ、勝負強さを求められるポイント練習がある。例を挙げると

- ・サーバーは1stサービスが入ったら次のボールは必ずフォアハンドで取らなければならないという条件でのポイント練習（サーバーが積極的にゲームを進めるためのドリル）
- ・サーバーは1stサービスが入ったらサービス&ボレーをし、ワイドにサーブをした時は1stボレーをオープンコートへ、センターにサーブをしたら相手の逆をつくコースに1stボレーをするという条件でのポイント練習（サーバーがプレーの



幅を広げるためのドリル)

- ・自分がゲームポイントもしくはブレイクポイントを握った時に次のポイントを落とすとポイントを没収され0（ゼロ）に戻る（勝負強さを求められるドリル）など。

重いボール（ヘビーボール）

ベースラインでのストロークにおいてはスピンの多くかかったボールを打つということに意識を持たせる。ストロークの威力の判断はスピードではなく、より重いボールであるかというのが判断材料となる。日本でもここ数年でエッグボールという呼び名で浸透され始めているが、あくまでバリエーションの中の一つであり、日本の指導ではフラット系のボールを打たせることが多いので、海外での日本人選手の印象はボールがフラットで軽い（特に女子選手）というイメージが多い。

ショートラリー

サービスボックスの中だけでの短い距離をラリーする時間が長く、その中でスピンやスライスのかけ方、ボレーの細かいタッチなどをかなり時間をかけて練習をする。球出しなどの基本練習がない代わりにこのような方法でテクニックを学ぶ。

- ・回転のコントロール：スピンVSスピン、スピンVSスライス、スライスVSスライス
- ・ステップの確認：フロントフットホップ、バックフットピボット、モーグル
- ・動きの確認：2フォア&1バック、2ボレー&1ストローク

⑤コートサーフェスについて

現在のテニス界では主にハードコートもしくはレッドクレイが主流であるが、共通しているのはどちらもよく弾みバウンドが高いということである。オーストラリアのコートもハードコートが主流で非常にバウンドが高い印象を受けた。それに慣れている選手はそのコートの特性を活かし、更に弾ませるために先に述べたようにヘビーボールを多用する傾向にある。海外の試合に行き、まず驚くのはその点であり、普段球足の速いハードコートやバウンドの低い砂入り人工芝のコートでプレーしている日本人にとってはいつも以上に高い打点で打たなければならないケースが多く、これをアジャストし、慣れていくまでに日本人選手は苦勞する。特に砂入り人工芝のコートについては世界的にほとんど見ることはなく、日本とオーストラリアくらいだと言える。しかし、オーストラリアでも砂入り人工芝のコートはあくまで一般愛好者向けのコートという認識であり、競技者はハードコートを使用し、大会でも極力使用することを避けるなどしてなるべく世界基準のコートでプレーさせる努力をしていた。

⑥パットキャッシュ氏から学んだこと

短い時間ではあったが、同じコートに立ち、彼の指導を間近で見ることが出来た。ネットプレーヤーのキャッシュ氏らしく、PCITAのどのコーチよりもネットプレーにかける時間が多かった。現在はグランドストローク主体のプレースタイルが多く、数多くの世界的ネットプレイヤーを生み出したオーストラリアでもその流れは強くなっているが、最終的にポイントを取りに行くために必要になってくるのはとどめとなる

ネットプレーだという言葉通り、相手をコートの外へ追い出すのに最も効果的なアングルボレーの練習が多かった。ドリル自体は特に目新しいものはないが、一つ一つの質が高いと練習もシンプルになっていくのではないかと思う。しかし、サービスに関しては彼独特の指導法があり面白かった。



普通は肘を柔らかくムチのようにしなやかに使うというアドバイスが多い

が彼の場合は肘を伸ばし打点を後ろにして打つ。極端に言えばオーストラリアで有名なスポーツ、クリケットのような投げ方をイメージして打つように指導していた。その方がよりスピンのかかり、より多くのスピンをかけられることが良いサービスであり、安定をするという理論であった。また、私のイメージでは1stサービスがサービスの中心であり2ndサービスはその補助的ショットであるが、キャッシュの場合には最も安定し、よりスピンの効いた2ndサービスがサービスとしての中心であり、1stサービスは2ndサービスをより強く打つイメージだと言われたのが大きな違いであった。

一番印象に残ったことはとにかく選手と打ち合うことである。彼自身がまだシニアツアー等でプレーをしているということもあるが、時には試合をすることもある。こちらでは選手同士の練習が基本でプライベートレッスンでもない限りはコーチと打ち合うことはない中でキャッシュ氏の指導は非常に熱意を感じた。伝説的な偉大な選手と打ち合うことで選手はトップ選手のボールの質を肌で感じる事が出来、選手には大きな影響力を与えらると思う。

⑦フットワークについて

トップ選手、特にフットワークが良いとして知られる、オーストラリアでは一番新しい世界チャンピオン、レイトン・ヒューイットのフットワークを解析し、それぞれに名前をつけマニュアル化したフットワークの指導を取り入れており、フォームの指導はあまり行わない中でフットワークに対する指導は細かく非常に多かったので練習内容とは別に報告をする。

非常に細かい内容で、どこにボールが来た時にどのステップでどのようなショットを打つかまで決まりがあるが、それを全て行うのはラリーが続いている中では逆に頭が混乱してしまうので、これを全て取り入れるというよりも、選手が間違った動きをしている場合にアドバイスをを行うことが最も効果的で、ステップの形を覚えれば選手とコーチの共通の意識が持ちやすく、指導する際には大きなメリットとなる。ここでは15に分けられた動きの中から練習の中で取り入れる頻度が多かったものを紹介する。

Step Down Pivot (踏み込んで打ち、体重を前に乗せるような動き)

踏み込んでコンタクト→体重を前に乗せ後ろ足の膝を落とす→後ろ足を45°前へ



出す（フォアなら2時の方向、バックなら10時の方向）

2 Foot Pivot（速く深いボールに対する処理の動き）

オープンスタンス→コンタクトしながら2本足で正面を向くように回転→体が浮かないように後ろ足の膝を落とす

Reverse Spin（高く弾む深いボールに対する動き）

セミオープンスタンス→空中で回転し、反軸足へ体重を移しながらコンタクト→反軸足で着地する

Forward Transfer（打ち込むボールに対しボールにより威力を出すための動き）

セミオープンスタンス→空中で回転し、反軸足へ体重を前に移しながらコンタクト→反軸足で着地、軸足は前へ出す

Mogul Step（振られた状態からのカウンターショットの動き）

オープンスタンス→サイドステップをするように足を入れ替えながらコンタクト→体が浮かぬよう低い姿勢のまま外側の足を大きく開いて着地

Front Foot Hop（短く低いボールに対する攻撃のための動き）

踏み込んでコンタクトしながらホップ→後ろ足は上げる→後ろ足を前に出して着地

Back Foot Pivot（深いボールに対する守備のための動き）

後ろに下がる→セミオープンスタンス→軸足に体重に乗せながらコンタクトし、反軸足を上げる→反軸足を前に着地

⑧ コーチングの違いについて

練習スタイルの他に、コーチングにも大きな違いがあった。コーチは選手とのコミュニケーションを大切にし、コート上でのディスカッションが非常に多かった。各ドリルの前にはコーチが練習のポイントはどこか質問し、選手が答え、意見を交換しながら練習の意図を理解する。選手によってはコーチが導きだそうとする答えと全くピントがずれた答えをする選手もいるが、失敗を恐れずに発言をする。自主性、表現力を引き出すためには非常に有効な指導方法だと感じた。

日本では答えを引き出そうとしても失敗することを恐れて発言を躊躇する子の方が多いという気がする。また、コーチは選手を一人の人間として尊重しており、高圧的な指導はなく、声を荒げることもない。問題があれば話し合い解決するのが非常に印象的であった。

⑨ テニスクイーンズランドエリートキャンプを視察して

クイーンズランドテニス協会主催の強化合宿の視察。主にブリスベンやゴールドコーストのトップジュニア集まった。特に12歳～14歳の男子のレベルが高く、体の大きな選手は意外と少ないがテクニックがあった。バックのスライスやボレーなど

完成度はまだまだだが、基本の形は出来ているので継続して練習を積みれば将来的には優れた選手に成長するだろうという印象を受けた。

やはりここでも球出しはせずラリー練習とポイント練習を中心としたオープンスキルを鍛える練習がほとんどだった。午前と午後の練習の間にはボードを使って戦術面やメンタル面の講義もあった。内容的には基礎的な部分が多かったが、知識の少ない低年齢の選手には必要なことなので、こういったオフコートでの時間の使い方も参考になった。



⑩地元のジュニア大会を視察して

ゴールドコースト、ブリスベン近郊ではほぼ毎週末は試合があり、若い選手が経験を積む場になっている。ジュニアの年齢別以外にもオープン部門もあり、これらを1つの大会に重複して申し込むことも出来るので、1大会の中でも多くの試合を経験できる。日本のジュニア選手はほとんどが全国大会の地域予選や都道府県予選が多く、今、勝たないと次のステップに進むことが出来ない大会が多いので、どうしてもリスクを冒さずミスの少ない無難な試合をしてしまう傾向にある。こちらでは一つ一つの大会が独立しており、負けてもまた翌週には新しい試合が始まるので練習してきたことを試しやすい状況にある。

その中で印象的だったのは14歳の女子選手で、試合には負けても最近では男子でも多用しないサービス&ボレーをほとんどの場面でトライする選手がいた。日本でそのようなトライをする選手はまずいない。また、毎週そのような試合に参加しているので試合経験が圧倒的に多いことも日本とは大きな違いを感じた。1日に3試合をこなしたり、朝7時半から試合がスタートすることも当たり前で、オーストラリア人の精神的タフさはこのようなところからきているのではないかと感じさせられた。

6月には教え子で中学生チャンピオンの齊藤秀がPCITAを訪れ、ゴールドコーストジュニア選手権という地元では大きい方に入る大会でレベルも高い試合にも参





加した。最初は私と同様にこちらでの練習方法の違いや環境の変化に戸惑いを感じていたが、中学生チャンピオンの意地を見せ、見事に優勝した。しかし、ストロークでのボールの多さ、高く弾むコート、強力なサービスに戸惑いを感じていた。



日本のジュニアはトップ選手でもこうした外国人との対戦経験が少なく環境や相手のボールに慣れるまでに時間がかかってしまう傾向にある。日本で選手を強化、育成するにはいかにして外国人との対戦を増やすことが出来るかが今後の課題となるであろう。

⑪ゴールドコースト女子国際を視察して

クィーンズランドで唯一行われる女子の公式戦の視察。会場となったロイヤルパインリゾートはゴルフの女子公式戦も行われている。テニスコート自体は面数も少なく、日本の感覚では観客動員などのキャパシティを考えると公式戦をするほどの大きな会場ではないように見えるが、ドロー数を少なくすることで試合数を調整し、昼の部と夜の部で観客の入れ替えをするなどして観客動員のための工夫をしている。こういった努力をすれば大きなスタジアムを確保しなくても日本で十分に公式戦を開催することが出来るのではないかと感じた。



試合はシングルス、ダブルスの準決勝を視察した。今大会の目玉選手、ヒンギス選手のプレーを楽しみにしていたが、相手選手の怪我のため、数ゲーム終わった所で途中棄権となってしまった。しかし、がっかりする観客に応えるようにヒンギス選手は試合後もコートに残り、ボールパーソンの女の子や観客をコートに招き、ラリーやゲームをし、観客を楽しませてくれた。スター選手だけあり、この辺りのファンサービスも一流であった。

⑫全豪オープンを視察して

かつては他のグランドスラムと比べ人気がないと言われてきた全豪オープンであったが、運営を含め、色々な改革を試み興行面でも急成長をしている。オーストラリア人選手にトップ選手が少なくなってしまうことや、アジア選手の活躍もあり、近年では「アジアオセアニア地域のグランドスラム」というキャッチフレーズを付け、アジア人選手にWCを与えたり、センターコートなどのショーコートでプレーさせるなど、かなりアジアのテニスマーケットを意識した大会となっている。

日本人男子として2年振りに本戦に出場した添田豪は勤務先である荏原SSCのアカデミー生として直接の担当ではなかったものの、小学校の頃から彼の成長振りを見てきた一人としては非常に嬉しかった。

初戦は世界ランキング9位のマリオ・アンチッチ(クロアチア)との対戦。ショーコートでのオープニングマッチということもあり、多くの観客が入る。オーストラリアはクロアチア系の移民が多く、サッカーのクロアチア代表ユニフォームを着た50人程の応援団が試合前から盛り上がっていた。試合は序盤互角の戦いをし、先にブレイクをするチャンスがあったが、そこからアンチッチの武器であるサービスが連続して決まり、流れを失ってしまった。その後も堅実なプレーをするアンチッチが常に主導権を握り、残念ながら添田はストレートで敗れてしまった。アンチッチは派手さはないが一球のボールに重さを感じた。バウンドも高いためにボールのキレとタイミングで勝負をする添田はいつもよりも若干打点が遅れ(押され)てしまいアンフォーストエラーが増えてしまった。また、大事な場面で勝負出来る武器もなかったように感じる。ベビーボールへの意識への問題、コートサーフェスの問題、プレースタイルの問題など皮肉にも今回の研修で感じた問題点が敗因となってしまった。

また2週目からはジュニア部門に参加したナショナルチームのサポートをした。その中には現在の教え子である守屋宏紀が参加しており、2ヶ月振りの再会となった。試合は2回戦でシード選手を破りベスト16に入り、ベスト8入りをかけた試合には川延栄一氏や杉山愛選手にも応援に来ていただき、試合後にはテレビ局のインタビューを受けたりするなど華やかな舞台の中で戦えたことは今後の選手生活に大きな財産になるだろう。





大会終盤は自宅にてテレビ観戦となったが、こちらでは年が明けてから全豪オープン終了までの約1ヶ月間ほぼ毎日テニス中継があり、その放送時間の多さに驚いた。全豪ではメイン種目のシングルスはもちろんのこと、ダブルスやミックスダブルスまで放送があった。また前哨戦では決勝の後の表彰式や選手、役員、スポンサーのスピーチまであり、見る気がなくてもテレビのスイッチを入れればテニスが流れてくるのでテニスをしていない人でもテニスを語る事が出来るほどである。実際、私もこの時期はパットキャッシュと書かれたアカデミーのTシャツを着ていると話かけられることが多く、人々の関心も高い。そんな環境で育つ子供たちは自然と日頃からテニスに触れ、テニスを覚えていくのではないかと感じさせられた。テニスは教えるよりも目から入った情報をダイレクトに伝える方が吸収は早いので、教えなくてもある程度打ててしまうというのはこの辺りに大きな要因があると思われる。

⑬その他、現地での生活について

オーストラリアは今、経済が好調でバブル期であるということもあり、物価の高さに驚いた。不動産はもちろんのこと、生活用品も日本以上に高く、ペットボトルのドリンクが定価300円もした。それに加え、出発時1ドル85円だった円が、一年後には105円になるなど円安の影響もあり生活に関しては非常に厳しいものがあつた。



今回は家族も同行し、長男は幼稚園

に通っていたが、永住者に関しては国から80%の補助が出るものの、私達のような一時滞在者では月8万円とこちらも日本の感覚から考えると割高であった。

しかし、物価が高いことを除けば気候や生活環境は素晴らしく、多くの日本人観光客や移住者がいることもうなずける。現地では日本人を対象としたありとあらゆる職種があり生活面で苦勞することは少なかった。特に病院に関しては会話に不安がある私達としては非常にありがたかった。

また、オーストラリアの人々は労働時間が短く、週末の休みをエンジョイするために仕事をするという考えがあり、週末にはパーティーをして友人と楽しく過ごすなど生活にゆとりを感じた。観光地という土地柄、大きなイベントが多く、ゴールドコーストマラソン、インディーカーレースなど、日本ではあまり目にする機会がない他のスポーツも間近で見ることが出来、大きな刺激を受けた。

⑭これからの課題

移民の国、オーストラリアと比べると外国人との対戦が少ない日本では、世界のテニスを知る機会が少なく、世界に通用する選手を育てるという目標はあるものの、日頃の対戦相手は日本人なので、どうしても日本人に勝つための日本人のテニスになってしまう現状にある。以前に比べればジュニアの頃から海外遠征を多くこなし、

経験を積ませる流れはあるが、これは経済的にも恵まれたごく一部の選手、もしくは協会のサポートを受けたナショナルチームに限られている。こういった状況は簡単に変えられることではないので、今後は世界に通用する日本流の確立が必要になるのではと思う。

例えば野球は主に国内で選手を強化、育成しているのもそれほど多くの海外経験を積んでいる訳でないが、今では多くのメジャーリーガーを生み出している。特にイチロー選手や桑田選手の野球に対する取り組み方はメジャーリーグでも注目をされており、日本人選手の技術の高さ、正確性が評価されている。テニスにおいても国内での強化、育成がそのまま世界で通用するような図式を作ることが成功への近道ではないかと思う。

(4) 研修を終えて

今回の研修を終えるにあたり、まずこのような機会を与えてくださった日本オリンピック委員会、日本テニス協会、勤務先である荏原湘南スポーツセンターの関係者の皆様にお礼申し上げます。

選手時代から現在まで30カ国以上の国を訪れてはいましたが、試合となればどうしてもホテルと試合会場の往復になってしまい、その国の文化や歴史、生活習慣、国民性などといったところまでは触れることは出来ませんでした。今回のようにじっくり腰を据え生活する中で、これまでに感じる事が出来なかった色々な経験をする事が出来、視野が広がったように感じます。海外から日本を見ることで、日本のテニス界を第三者の視点から見る事が出来たのは今後の指導にも大きな変化が出ると思います。

今回の研修では多くのことを学ぶことが出来ましたが、それと同時に現在の日本とオーストラリアにおけるコーチングのレベルにそれほど大きな差はないということも実感出来ました。

日本の指導者の多くは非常に勉強熱心で、アドバイスも細かいと思います。オーストラリアはこれまでの歴史と伝統のから来る自信とポリシーを持っているというのが大きな違いです。多くのグランドスラムチャンピオンを生み出したオーストラリアではいくつもの成功例がありますが、日本は近年において、女子は伊達公子選手を始め成功例は沢山あるものの、男子は松岡修造氏一人で、具体的成功例に乏しいので、指導者も未だ模索の時期となっているのが現状です。

しかし、次なるスターを生み出すことが出来ればテニス界は活性化され、勢いが出てくるのではないかと思います。最初の壁を破ることは困難なことではありますがテニスに夢を持つ人々が知恵を出し合い協力し、自分たちで歴史を作るという気持ちで取り組めばその壁は破れるものと信じています。私もその中の一人として今後も日本テニス界の発展のために微力ながら貢献していければと思います。